

## 仮定法とその特徴。

### (1) 仮定法とは。

仮定法というのは、まさに仮定の話（つまり現実の逆、或いは反する）を述べる言い方です。下の日本語の例文を見てください。

「私は鳥ではないから、君のところに飛んで行くことは出来ない」 [現実]

この現実を裏返して、つまり仮定的に表現すれば以下のようになりますね。

「もし私が鳥なら、君のところに飛んで行くことが出来るのだが」 [仮定]  
[事実に反する]

このように、仮定法の表現というのは、現実を裏返したものの言い方で、その言葉の裏に、常にそれに反する現実があるのがその特徴です。

### (2) 仮定法の最も大きな特徴。

仮定法においては、If節には必ず「(助)動詞の過去形」もしくは「過去完了形」を用います(つまり「現在時制」「未来時制」「現在完了」が使われることはない)。具体的には、

- ①現在の(事実に反する)仮定をする場合、仮定法では(If節に)「過去形」を用いる。
- ②過去の(事実に反する)仮定をする場合、仮定法では(If節に)「過去完了形(had+p.p.)」を用いる。

このように「(文中の)時制と、その表している内容がズれる(現在の内容を述べるのに過去形を用い、過去の内容を述べるのに過去完了形を用いる)」のが、仮定法の最大の特徴といえます。

(ex) If it rains tomorrow, I will stay home. もし明日雨なら、私は家にいます

上の英文は、if節に「現在時制」が使われていますね。この時点でこの英文は仮定法ではない、と見極められなくてはなりません。これは直説法で、if節は単なる「条件」を述べているにすぎないのです。

※直説法とは、あることを事実として述べるときの動詞の形のことを言う。

《参考:仮定法はなぜ「現在」のことを述べるのに「過去形」を使うのか?》

理由は簡単で、「現実との距離」を感じているからです。たとえば先の例文の「もし私が鳥なら…」。これを身近なこととして感じる人はいないはずですが。現実のものでない出来事は、自分のまわりにはない、どこか遠く離れたイメージを感じてしまいますね(「現実離れしている」という表現があることでも分かります)。この「遠く離れた」イメージが、「過去」の持つ「離れた」イメージとピッタリ重なるのです。

「過去時制」で「距離」を表すのは、丁寧な気持ちを表す場合にも使われています。中学校の英語で Will you ~? というより Would you ~? と、will の過去形の would を使った方が「丁寧」な表現になると習いましたね。なぜ過去形を使った方が丁寧な意味になるのでしょうか。それは、「丁寧さ」つまり「相手との距離感」を、「過去」のもつ「離れた」イメージで表そうとしているのです。

レクチャー2

仮定法過去(「現在の仮定(もし今~なら)」をする場合の公式)。

「仮定法過去」とは、現在の事実と反する事柄を頭に思い描いて「もし(今)~なら」という(現在の)仮定、願望を表すものです。現在のことを述べるのに(if節に)過去形を用いるのが特徴です。その基本公式は以下の通り。

If+S<sub>1</sub>+ (助)動詞の過去形~, S<sub>2</sub>+助動詞の過去形+V【原形】…  
「もし(今)~なら」 「…だろうに」

(ex) If I were[w<sup>as</sup>] you, I would not do such a thing.  
もし(今)僕が君なら、そんなことはしないだろうに

If he had enough money, he would buy the stock.

もし彼に十分な金があればその株式をかうだろうに

「仮定法過去」の構文に関するポイントをいくつかあげておきましょう。

- ①if節の動詞がbe動詞の場合、主語の人称に関係なく **were** が用いられる(ただし was を使っても間違いではない)。
- ②「(主節、つまりifのついていない方の「S+V」にくる)助動詞の過去形」とは、具体的には **would, could, might, should**。このうち **should** がくることはまれ。
- ③if節の方にも助動詞の過去形が来ることがあるが、それは、「可能性」を表す **could** か、「意志」を表す **would** など。このうち **would** が入る場合というのは、非常にへりくだったものの言い方で、受験ではほとんど出てこないといっている。一応それぞれ例文をあげておく。

(ex) If I **could** get a visa, he **would** come to Japan.

もしビザをとることができれば、彼は日本にくるだろうに

I **would** be very grateful, if you **would** do that for me.

もしそれをしていただけのでしたら大変光栄なのですが

### レクチャー3

仮定法過去完了(「過去の仮定(もしあの時~なら)」をする場合の公式)。

「仮定法過去完了」とは、過去の事実と反する事柄を頭に思い描いて「もし(あの時)~だったら」という(過去の)仮定、願望を表すものです。過去のことを述べるのに(if節に)過去完了形を用いるのが特徴です。その基本公式は以下の通り。

If+S <sub>1</sub> + had+p.p.~, 「もし(あの時)~だったら」	① S <sub>2</sub> +助動詞の過去形+have+p.p.... 「(あの時)~だったろうに」
	② S <sub>2</sub> +助動詞の過去形+V[原形].... 「(今)~だろうに」

「仮定法過去完了」は、If節、主節共に過去の仮定をしている場合(①)と、If節は過去の仮定、主節は現在の仮定をしている場合(②)。つまり「過去+現在の仮定」というミックス型の2パターンあることをおぼえておきましょう。

(ex) If I **had known** your trouble, I **could have helped** you then.

もし君が困っているのを知っていたなら、その時君を助けてあげられただろうに

If I **had not studied** hard, I **might not attend** this school now.

もし一生懸命勉強していなかったなら、今この学校には通っていないかもしれない

#### レクチャー4

仮定法未来(「未来の仮定(もし~なら)」をする場合の公式)。

「仮定法未来」とは、**実現可能性の低い未来の事柄の仮定を表す**ものです。If節に should と、were[was] to を用いる2つの公式があります。それぞれの基本公式は以下の通り。

※最近の文法書では「仮定法未来」という呼び方は、されることが少なくなりました。

(1) 「If+should」型の公式。

If+S <sub>1</sub> +should+V【原形】~, 「もし万~なら」	S <sub>2</sub> +助動詞の過去形+V【原形】...
	1.命令文 2.S <sub>2</sub> +will【can/ may】+V【原形】...

「If+should」型の最大の特徴は、主節に「命令文」や「will【can/ may】」を用いた文(直説法という)が来ることがあるという点です。

- (ex) If you **should** come to the party, she would be very happy.  
 もし万が一君がそのパーティに来てくれれば、彼女はとても喜ぶだろうに
- If it **should** rain tomorrow, I will stay at home.  
 もし万一明日雨が降れば、僕は家にいます
- If he **should** come to see me, let me know as soon as possible.  
 もし万一彼が私に会いに来たら、すぐに知らせてください

(2) 「if+were[was] to」型の公式。

If+S<sub>1</sub>+ were[was] to+V【原形】～, S<sub>2</sub>+助動詞の過去形+V【原形】…  
 「もし仮に(万一)～なら」 「…だろう」

- (ex) If you **were to** die today, what would you do?  
 もし仮に今日死ぬとしたら、君はどうしますか

(3) 「If+should」型と「If+were[was] to」型の用法・意味的な違い。

両者の違いは、(1)の「If+should」型は、「極めて実現の可能性の低い事柄」に関してのみ用いるのに対して、(2)の「If+were to」型は、

- ①「極めて実現の可能性の低い事柄」 ☞「If+should」型でも表現できる。  
 (ex) If it **were to**[=should] rain tomorrow, I will stay at home.  
 もし万一明日雨が降れば、僕は家にいます
- ②「絶対に起こりえないような事柄」  
 (ex) If the Sun **were to** rise in the west, my love would never change.  
 もし仮に太陽が西から昇っても、ボクの愛は変わらない
- ③「控えめな丁寧な提案・依頼」  
 (ex) If you **were to** move your chair a bit, we all could sit down.  
 席をもうちょっと動いていただけると、私たち全員が座れるんですが

といったいろいろな場面で使えるという点です(②や③は「If+should」型では表現できません)。

## レクチャー5

### 公式の整理。

ここで、仮定法関連の文法問題で、瞬時に解答を引き出すための「公式の整理」を試みましょう。

(1)仮定法においては、If節には必ず「過去形」もしくは「過去完了形(had+p.p.)」を用いる(つまり「現在時制」「未来時制」「現在完了」がIf節に使われることはない)。

Ⓢif節に入りうる助動詞の過去形となると could がほとんど。

具体的には、

- ①現在の事実に反する仮定をする場合、仮定法ではIf節に「過去時制」を、主節には「助動詞の過去形+V【形】」を用いる。
- ②過去の事実に反する仮定をする場合、仮定法ではIf節に「過去完了形(had+p.p.)」を、主節には「助動詞の過去形+have+p.p.」を用いる。  
Ⓢ「主節」とは、接続詞(if)のついていない方の「S+V」のこと。

(2)仮定法で、If節に「(助)動詞の過去形」があったら、主節は必ず「助動詞の過去形+V【形】～」になる。

Ⓢ唯一の例外は「If+should」型。

(3)仮定法で、If節に「had+p.p.～」があったら、主節は2通りの可能性がある。  
つまり

- ①主節の方も過去の仮定をする → 助動詞の過去形+have+p.p.～を使う。
- ②主節の方は現在の仮定をする → 助動詞の過去形+V【形】～を使う。

(4)主節に 助動詞の過去形+have+p.p.～]があったら、If節は「had+p.p.」になる。

會例外として以下のようなものがある。

(ex) If I were a bird, I could have flown to you.

もし私が鳥ならば、(あの時)あなたのところに飛んで行けたらうに

「昔」も「今」も「私≠鳥」である事実には変わりはないので

If I had been a bird

とはあまり言わない。このパターンが受験で問われることはほとんどないので、あまり心配しなくていい。

(5)主節にwill (can, may)が使われたり、命令文が来たりするような仮定法は「If+should」型だけ。

## レクチャー6

### 「if の省略」に関して。

仮定法の if は省略することもできます。ただ、if が省略されると、条件節は「疑問文と同じ語順」になります。以下にその例をあげてみました。

	ifが省かれると	
(ex) If I were a bird,	→	Were I a bird,
If I had had money,	→	Had I had money,
If it should rain,	→	Should it rain,
If I were to die now,	→	Were I to die now,

仮定法を用いた慣用表現。

仮定法の基本が理解できたら、次はその仮定法を用いた慣用表現を覚えましょう。どれも受験では頻出の表現ばかりです。

(1) **but for A**

but for A は「もしAがなければ(なかったならば)」という意味です。  
without A で言い換えることができます。

(ex) **But for** your help, I could not manage to do this.

=**Without** your help

もしあなたの助けがなければ、これをやり遂げることはできないだろう

**But for** your advice, I could not have succeeded in my life.

=**Without** your advice

もしあなたの助言がなかったならば、私は成功できなかったことだろう

but for A が「もし(今)Aがなかったなら」なのか「もし(あの時)Aがなかったならば」なのかは、主節の形と意味で判断することになります。

そしてこの but for A は If節で書き換えることができます。その場合、「もし(今)Aがなかったなら」、「もし(あの時)Aがなかったならば」は時制を変えて表現しなければなりません。以下がその公式です。

① 「もし(今)Aがなければ」 = if it were not for A  
= were it not for A

② 「もし(あの時)Aがなかったならば」 = if it had not been for A  
= had it not been for A

(ex) **But for** you, our project wouldn't succeed.

=**Without** you

=**If it were not for** you

=**Were it not for** you

君がいなければ、我々の計画は成功しないだろう

But for your timely hit, our team could not have won.

=Without your timely hit

=If it had not been for your timely hit

=Had it not been for your timely hit

君のタイムリーヒットがなかったら、うちのチームは勝てなかっただろう

ちなみに「もし(今)Aがあれば」「もし(あの時)Aがあったならば」は、with Aで表します。

(ex) With a little more patience [忍耐力], he would have succeeded.

=If he had had a little more patience

=If he had been a little more patient ☞形容詞形のpatientを使えば、動詞はbe動詞を用いることになる。

もう少しの忍耐力があったなら、彼は成功していただろうに

## (2) ㊦ wish S+V [仮定法]~

㊦ wish S+V~ は「~ならなあ(と思う)」という、実現不可能(又は満たされない)願望を表すのに用いる表現です。その公式は以下の通り。

㊦ wish { ① S + V [(助)動詞の過去形] : もし(今)~ならなあ  
② S + V [過去完了形(had+p.p.)] : もし(あの時)~だったならなあ  
S + V [could+have+p.p.] (できていたら)

☞「助動詞+have+p.p.」となる場合、could have+p.p.が最も多い。

これとほぼ同じ意味になるものとして、以下のような表現があります。

① If only S+V~ ☞I wishの言い換えとしては、If onlyが最も出題頻度が高い。

② Would that S+V~

③ Wish to God S+V~

④ How I wish S+V~:「本当に~ならなあ」

=I dearly wish S+V~

(ex) If only I had known his trouble. 彼のトラブルを知っていさえしたら

=I wish I had known his trouble.

また ㊟ wish S+V【仮定法】～ は、「I'm sorry (that) S+V～:Sが～(でない)のは残念だ」という直説法(つまり実際の話をありのままに述べる言い方)を使って書き換えることができます。ただその場合は、仮定法と異なり、現在の内容は現在時制で、過去の内容は過去時制で書かなくてはなりません。

「I'm sorry」の部分を「It's a pity」、「What a pity it is」と表現することもできます。

(ex) I wish I **were** in your position.

=I'm sorry (that) I **am not** in your position. ☞直説法で書き換えると現在時制になる。

私があなただの立場ならなあ

I wish you **had helped** me then.

=I'm sorry (that) you **didn't** help me then. ☞直説法で書き換えると過去時制になる。

君があの時僕を助けていてくれたらなあ

#### 《wish の後の would や could に関して》

「I wish S+V～」のVの部分に助動詞の would や could (又はmight等)が使われることもあるが、意味上話者が必要と思われるときに付くだけで、必ず必要というものではありません。would[ccould,might]+have+p.p.～は、過去の内容を表すことになります。

ccould が入れば「～できる(ならなあ)」、ccould have+p.p. で「～できていた(ならなあ)」、would が入れば「～してくれれば[であれば]いい(のになあ)」、would have+p.p. で「～だったらよかった(のになあ)」といった意味が加わることになります。

(ex) I wish I **could** play the guitar well.

ギターを上手に弾くことができればなあ

I wish I **could have met** you then.

あの時君に会うことができていたならなあ

I wish you **would give up** drinking.

あなたが飲酒をやめてくれればなあ

### (3) as if[though] S+V【仮定法】～

as if[though] S+V～ は、「まるで～かのように」という意味を表します。  
その公式は以下の通り。

as if[though] {  
① S+V【過去形】～ :まるで(今)～である[する]かのように  
② S+V【過去完了形(had+p.p.)】～  
:まるで(あの時)～だった[した]かのように

(ex) She behaves as if[though] she **were** a queen.

彼女はまるで女王様のように振る舞う

He talks as if[though] he **had been** a baseball player.

彼はまるで野球選手であったかのように話す

この as if[though] S+V～ について、いくつか注意点をあげておきましょう。

①as if の後ろが「仮定法」でない(つまり直説法になっている)場合がある。  
look, seem が as if の前にくるとそうなる場合が多い。「(実際に)まるで～のように」というニュアンスになる(つまり「仮定」ではなくなる)。

(ex) It looks as if it **is** going to rain. (本当に)雨が降りそうだ

②as if の後ろの「主語+be動詞」が省略されてしまうことがある。

(ex) She trembled as if (she had been) in a thunderstorm.

彼女は雷雨にあったみたいに震えていた

③as if to do[彫]～ という形もある。「まるで～するかのように」と訳す。

(ex) He shock his head as if to say no.

彼はあたかもダメだと言わんばかりに首を横に振った

### (4) would rather S+V【仮定法】～

would rather S+V～ で、「(むしろ)Sに～してほしい」という意味を表します。  
その公式は以下の通り。

would rather { ① S+V【過去形】～ :(今)Sに～してほしい  
 ② S+V【過去完了形(had+p.p.)】～:(あの時)Sに～してほしかった

(ex) I would rather you **came** next weekend.

来週末、家にきてほしいんですが

I would rather you **hadn't told** him such a story.

そんな話は彼にしてほしくなかったなあ(しないでほしかった)

#### (5) It is (high,about) time S+V【仮定法】～

It is time S+V～ で、「～する(すべき)頃だ」という意味を表します。  
 この構文の特徴は、S+V～ の「V」には必ず「過去形」が来る点です。  
 また、It is と time の間に about や high が割り込むことがあります、  
 それぞれの意味の違いは以下の通りです。

① about が入れば「もうそろそろ」という意味が加わる。

② high が入れば「とっくに」と、不満を含意する意味が加わる。

(ex) It is high time you **went** to bed.

もうとっくに寝る時間ですよ

It is about time I **settled** down.

僕もそろそろ身を固めてもいい時期だな

#### (6) as it were

as it were は「いわば」という意味です。so to speak で言い換えられます。

(ex) He is, **as it were**, a walking dictionary.

彼はいわば歩く辞書だ

仮定法と時制(の一致)。

(1)「時制の一致」というルール。

まず「時制の一致」ってなんのことかわかりますか？ 簡単にいうと、これは、

「主節の動詞が過去時制になったりすると、従属節内の動詞の時制もそれに従って、同じように時制が一つ昔にずれる」

というルールです。たとえば

I think that he is wrong.

この英文の主節の動詞、think が (過去時制の)thought に変わると、that節内の is も (同じく過去時制の)was になるのです。

→ I thought that he was wrong.

このルールが適用されない場合というのがしばしばあって、その1つが「仮定法」なのです。つまり仮定法は「時制の一致の例外」なのです。

(2)仮定法は「時制の一致の例外」。

でもそれって具体的にどういうことを指しているのでしょうか。詳しく説明しましょう。

たとえば仮定法で

⑤ wish S+V~ .

という構文がありますね。「~ならなあ」と、(実現不可能な)願望を表す表現です。

(ex) I wish it would stop raining. 雨がやんでくれたらなあ

I wish I could go with you today.

今日あなたと一緒にいけるといいんですが

仮定法が時制の一致の例外というのは、この I wish の構文では、主節の動詞である wish の時制に関係なく、その後の過去形は、主節の時と同時であることを、そして過去完了形は主節の時より時制が一つ古いことを表すということなので

す。以下の例文でそれを説明しましょう。

①I wish I **had** a TV. 私は(今)テレビがあればなあ(と(今)思う)

②I wished I **had** a TV. 私は(今)テレビがあればなあ(と(その時)思った)

この①と②例文の I had a TV は(had は過去形ですから)、どちらも主節の時と同時点の内容を表しているのです。つまり①は、(主節のwishが現在時制なので)「(今)テレビがあればなあ」と、(今)現在の同時点でそう思っているのであり、②は、(主節のwishが過去時制なので)「(今)テレビがあればなあ」と、過去のその同時点でそう思った、ということなのです。

③I wish I **had had** a TV then.

私はあの時テレビがあったらなあ(と思う)

④I wished I **had had** a TV then.

私はあの時テレビがあったらなあ(と思った)

③と④の場合、例文の I had had a TV は(had had は過去完了形なので)どちらも主節の時よりも1つ前(昔)の内容を表しているのです。つまり③は、(主節のwishが現在時制なので)「(過去のあの時)テレビがあったらなあ」と、(今)現在思っているのであり、④は、(主節のwishが過去時制なので)「(それより更に昔のあの時)テレビがあったらなあ」と、過去のその時点で思ったということなのです。

この「仮定法は時制の一致の例外」というルールは、⑤+wish構文だけでなく、全ての仮定法で共通するルールです。よくこんな質問をする人がいます。

「先生、仮定法って、現在のこと(内容)は過去形で、過去のこと(内容)は過去完了形で表すんですよね。ならこの問題はどのようにして過去の内容のはずなのに(過去形が正解で)過去完了形では正解にならないんですか?」

Nancy felt as if she **were**[×had been] in a dream.

ナンシーは、まるで夢を見ているような気がした

このような質問をする人は、上記の仮定法のルールが分かっていないのですね。分かっていたら簡単です。「(あたかも)夢を見ている」ようなその状況と「(そのように)ナンシーが感じた」というのが、過去のその同時点で起こっているからなのです。その場合は過去形で表すんですヨネ(^-^)

If節のない仮定法。

A close friend would not say such a thing to you.

この英文、if節が見当たりませんが、助動詞の過去形を使っている点から、仮定法ではないかと判断できます(もちろんwouldには「過去の習慣」や「過去の意志」を表す用法もあるが、そう考えて訳しても意味不明になってしまう)。

この英文は、主語になっている名詞(a close friend)が、if節の代わりをしているのです。つまりこの英文の直訳は、「親友が君にそんなことを言いはしな  
いだろう」ですが、「もし(彼・彼女が)親友なら、君にそんなことを言いはしな  
いだろう」と表現し直すことが可能です。

=If he(she) were a close friend, he(she) would not say such a thing to you.

したがって英文中において、if節は見当たらないけれど

- ①現在の内容を述べている中に、突然「助動詞の過去形+V【願】～」が現れた
- ②過去の内容を述べている中に、突然「助動詞の過去形+have+p.p.～」が現れた

ら、仮定法ではと判断し、if節にあたる内容が、文中のどこかにもぐり込んでいる  
と考えてみるとよいでしょう。そして、if節の代用をしていると思われる語句を見  
つけたら、それを和訳の際にはif節のように訳出するといいい訳になるのです。

以下に if節以外の語句が、if節の代わりをしている様々な例をあげてみましょう。

(1)「名詞」が if節の代用をしている例。

(ex) It was so silent there that a pin drop might have been heard.

とてもそこは静かだったので、ピンが一本落ちても(でも落ちたら)聞こえ  
たかもしれないくらいだった

(2)「副詞」の otherwise がif節の代用をしている例。

(ex) Mr. Smith is very rich; otherwise he could not buy such an expensive car.

スミス氏は大変な金持ちだ。さもなければそんな高価な車を買えないだろう

(3) 「不定詞」がif節の代用をしている例。

(ex) To hear him talk, you might think of him as a leader of us.

もし彼が話すのを聞けば、君はひょっとしたら彼を我々のリーダーと思うかもしれない

④不定詞が「もし～なら」と、条件(仮定)の意味を表す場合の見極めは、主節に助動詞の過去形が使われているということ(ただwill/may等の場合もあるので見極めは慎重に)。

(4) 「副詞句(「前置詞+名詞」等)」がif節の代用をしている例。

(ex) What would you do in my place?

もし私の立場なら、あなたはどうするだろうか

With a little more care, you wouldn't have made such a silly mistake.

もう少し注意していたら、君はこんなばかな間違いはしなかったろうに

(5) 「(比較級の付いた)名詞句+and S + V【仮定法】～」の名詞(句)部分がif節の代用をしている例。

(ex) A few more steps and he would have stumbled on the root.

もしあと2、3歩歩いていたら、彼は木の根につまずいていたことだろう

④and は省略され「名詞, S + V～」という形になることもある。